

# 釧路ベイロータリークラブ会報

会長方針「コミュニケーションの活性化」

2024-2025 年度 第 18 回(通算第 1240 回)  
プログラム『職業奉仕例会』

■日時:令和 7 年 1 月 14 日(火)19 時 00分～ ■例会場:アクア・パール  
【会長】横山 豊 【副会長】伊藤 広樹 【幹事】後藤 義信

■ 点 鐘

横山 豊会長



■ ローターソング『我等の生業』

ソングリーダー 貝嶋 政治君



■ 来訪ロータリアンご紹介

佐々木 勉君 AG (釧路東 RC)  
中村 圭佐君 IM 実行委員長 (釧路東 RC)  
IM についてご挨拶



■ 会長挨拶

横山 豊会長



皆様こんばんは。  
前回上林先生が例会に来て頂いたときは、ちょうど出張と日程が重なってしまい、お話を聴くことが出来ませんでした

たので今回の卓話、楽しみにしていました。  
今から 7~8 年ぐらい前の話になりますが釧路空港の近くにあった、さわらび学園という障害者の施設の食堂の裏口に一週間ぐらい毎日猫が来ていました。多分餌が欲しくて

来てたと思うのですがエキノコックスの関係で餌はあげられないので、かわいそうに思って、さわらび学園の職員が家に連れ帰ったところ、腹に不妊手術の跡の細い針金が抜糸しないままあったそうです。その猫は今も職員の家で飼われており、その後ライフという保護猫の団体から譲り受けた猫と仲良く暮らしているそうです。外で暮らす猫の寿命は4~5年との事ですので倍ぐらい長生き出来ているのかなと思います。今日は飼い主のいない猫のTNR活動に御尽力されています、よつばスパイクリニックの上林先生が昨年引き続き例会に来てくださいましたのでTNR活動について詳しくお話を聞かせて頂けるのではないかと思います。それでは限られた時間ではございますが、上林先生、鈴木委員長どうぞよろしくお願ひいたします。

■ 幹事報告

後藤 義信幹事



1 第7分区各ロータリークラブ、浜中RC、根室RCから例会案内が届いております。

個人BOXの上に置いてありますのでご

覧ください。

2 例会に関するアンケート結果を個人のBOXの中に入れてありますのでご確認ください。

3 例会終了後、この会場にて理事役員会を開催致しますので、理事、役員はお残りください。

■ 各種記念日の紹介(親睦活動委員会)



【入会記念日】小平優之君、千葉潔君 以上2名 平成28年1月26日

【誕生祝】千葉潔君 昭和42年1月26日(58歳)

【結婚祝】該当者はありません。

・本日のニコニコ献金

横山豊君、後藤義信君、植原元晴君、森圭一郎君、平野知子君、漆崎隆君、澤田雅仁君、伊藤広樹君、千葉潔君、池田圭樹君、貝嶋政治君、美馬高俊君「上林先生、鈴木委員長宜しくお願ひします」鈴木敏夫君、

☆本日のニコニコ献金 ￥25000

累計 ￥418000

☆本日の小銭献金 ￥0

・皆さん、ありがとうございました。

・本日のプログラム

「職業奉仕例会」

職業奉仕委員会 鈴木敏夫委員長

鈴木委員長からよつばスパイクリニック 上林様のご紹介



上林亜紀子様のご講演

釧路市内で「よつばスパイククリニック」という猫の不妊手術専門病院を開業しております獣医師の上林亜紀子と申します。本日よりよろしくお願いいたします。獣の医者、馴染みのない職業かもしれませんが、獣医師会という大きな組織がありまして、その会員数が全国で約2万5千人、北海道獣医師会で3000人弱、さらに、獣医師会に加入していない人も多くいます。私が受験生だった頃に「動物のお医者さん」というマンガが流行り、獣医師という職業の知名度が上がったように思います。獣医師を目指す女性が増え、獣医師の学生の男女比が半々になった時代に獣医師になりました。獣医師の勤務先は診療に当たる臨床現場、大学や研究所の研究者や教員、製薬会社など企業で働く会社員、公務員や団体職員までさまざまです。「獣医といえば犬猫病院」のイメージが人きいかと思いますが、北海道は酪農が盛んなので、牛や馬など大動物を診る獣医師も多いのが特徴です。

農業共済組合(いわゆるNOSAI)の職員さんのほか、個人で開業している大動物の獣医師もいます。農家さんを回って家畜を診療する獣医さんは、対象が経済動物なだけに、シビアな判断を求められる場面も多いと思います。またエキノコックス症や狂犬病のように動物から人にうつる感染症、口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザのように、蔓延すると経済的損害が甚大となる感染症などを防ぐため、主に公務員獣医師が啓発、ワクチン接種や飼養管理について指導する役割を担っています。私の場合、これまでに、個人経営の犬猫病院、公務員として動物園・保健所・と畜場・振興局でそれぞれ働いてきました。今日は、私が経験してきた獣医師の仕

事を紹介させていただきたいと思います。初めに、「なぜ獣医師になったか」なんですけれど、小さい時から、犬や猫が常にまわりにいる環境で育ちました。虫取りをして遊び、ヘビもカエルもへっちゃらな子供でした。おたまじゃくしやザリガニ、カブトムシなどを捕ってきては育て、おまつりでは金魚やひよこをおねだりし、一人暮らしになってからはウサギやカメ、ハムスターなどアパートで飼える動物と暮らし、さらにはケガをしている動物を見つけては連れて帰って世話をしたりと、様々な生き物を飼ってきました。そんな私が獣医師になろうと決めたのは小学校5年生で、生まれた時からそばにいたペクという犬が亡くなった日です。朝学校へ行ってからも泣き続け1時間目が学級会に変わったという迷惑な子供でした。机に突っ伏して泣きながら「私は将来獣医さんになって動物を助けよう」と決心したのを覚えています。と言いつつも、その後なりたい職業はコロコロ変わり、高校で文系のクラスを選んだにも関わらず、再び獣医を日指すと行って浪人し、両親にはずいぶん負担をかけてしまいました。3年かけてやっと大学の獣医学科に入学するのですが、厳しい現実が持ち受けていました。動物の命を奪うことはある程度覚悟していたつもりでしたが、1年目から生きた動物を使った実習があり、実習で使う犬や牛を学生が世話していました。人間が利用するために存在する牛・豚・鶏などの産業動物や、飼い主の意向が優先される小動物病院の現実など、知れば知るほど目指すものが消えていきました。そんな悩みを抱えながら、夏休みに実習で行ったのが旭山動物園です。動物が持つ習性や能力を引き出す「行動展示」で一躍有名になった、旭川にあ

る動物園です。当時はまだ人気が出る前で、お客さんもまばらな頃でしたが、職員の方々は情熱たっぷり、愛情をこめて飼育に当たられており、学生の私に動物の面白い話をたくさん聞かせてくれました。「ここにずっといたい」と思うほど、とにかく楽しい毎日で、それまで持ち続けていた「動物園イコールかわいそう」のイメージが変わりました。動物園にいる動物のほとんどが、今や「動物園生まれ・動物園育ち」で、安全な暮らしと十分な食餌が保証されています。その代わり、自由が限定的なのは確かですが、そこを補うべく動物の生態を学び、動物福祉の立場から飼育動物の幸福な暮らしを実現するため試行錯誤する、現場の飼育員さんや獣医師のプロフェッショナルな仕事ぶりにしびれました。動物園で働くのは狭き門と諦めていましたが、大学卒業間近、たまたま釧路市が動物園の獣医師を募集しており、私は運よく就職することができました。野生動物はペットとは違い、直接触れることはほとんどありません。距離を保ち、離れたところから行動や健康状態を観察します。全身麻酔をかけないことには治療はもちろん触ることさえできないので、まずは檻の外からじっと眺め「このヒグマは小錦より重いかな？」とか「このトラは私と同じくらいかな？」と体重を予測して薬の量を決めます。麻酔が効きすぎて希少種を死なせてしまっは大変ですし、足りなくて処置の途中で動き出すとこちらの命が危険なので、責任重大です。動物園で動物の赤ちゃんが誕生するということは、繁殖可能な環境だということになり、飼育が成功している目安になります。動物の出産はうれしいニュースでした。現在、世界中に百数十万種の動物がいると言われていますが、近年

では年間4万種、1日に約100種の動物が絶滅し、そのスピードはさらに加速しているそうです。動物園で展示されている動物種の多くは絶滅の危機に瀕しているので、地球上から消えてしまう前に、人間の手で食い止める「種の保存」という取り組みも動物園、すなわち原因を作ってきた私たち人間の役目です。日々の観察を通して飼育や治療の技術を確立すること、調査研究を行うこと、動物のすばらしさを伝えることが動物園職員としての仕事でした。ゾウやキリン、ホッキョクグマといった動物たちは、普通に暮らしていたら見ることも近づくこともなく、学生時代に授業では習わなかった動物ばかりで、いつも手探りでしたが、諸先輩方からいろいろ教わりながら、得難い経験ができた8年間でした。動物園を退職した後は、臨床を基本から学び直すために友人の紹介で大阪府にある動物病院の勤務医として働きました。今日では、犬猫、小鳥やウサギ以外にも、ハリネズミや爬虫類など様々な小動物や、ミニブタ・マイクロブタと家畜までがペットとして飼われるようになり、都市部には眼科、皮膚科、外科など特化した診療科を持つ病院もあり、腫瘍や画像診断など専門医も増えて、動物の世界も人間並みの医療が求められ提供されるようになりました。私が勤めたのは「町の獣医さん」という感じの小さな病院でしたが、盆も正月もなく朝から晩まで働いていました。当時はそれが普通でしたし今もあまり変わらないかもしれません。知識や技術だけでなく、相当の体力と気力が求められる業種だと思います。言葉を話せない動物に代わり、飼い主さんとのコミュニケーションも大切です。「人間が苦手だから獣医になった」という人は意外と多いのですが、動物を相手

にするということは、人間を相手にすることに他ならず、なかなか理想どおりにはいかないものです。大阪という地域柄もあってか、飼い主さんは個性派揃い、言うことは言うタイプの方が多かったです。納得して治療を受けてもらうため、選択肢を示し、とにかく詳しく説明する院長だったので、とても勉強になりました。毎日数々の症例や急患に対応しながら、新しい知識や技術を取り入れ、食事や睡眠もそこに診療に当たられている、タフな獣医さんたちを尊敬してやみませんが、「私には無理」と2年で音をあげて北海道に帰ってきました。気が付けば40歳近くになっていた私は「暦通りに休める仕事がしたい」という理由で、次の仕事に北海道職員を選びました。動物から離れ、公衆衛生に携わる獣医師として、保健所で「食品衛生監視員」の仕事がスタートしました。飲食店の厨房や食品工場の衛生指導、お祭り屋台の営業許可、食中毒が発生した時の調査などを担当していました。初めて住む土地なので、いろいろ行ってみたいところですが、管内の飲食店やイベントにプライベートで行って、違反を見つけてしまうと嫌なので、小心者の私はなるべく避けるようになり、休日の楽しみが減ってしまい残念でした。貝毒の調査ではホタテ船に乗り、船酔いで仕事にならないこともありました。同じ課の隣の係では理容・美容や温泉の衛生業務を担当しており、いろんな仕事があるものだと言ったものです。もうひとつ忘れられないこととして、北海道に戻った最初の年、慣れない仕事で必死だった頃に、母を胃がんで亡くしました。欠員の多い職場でしたが有給休暇を万度に使わせていただけのおかげで、母に付き添い、お別れの時間を持つことができました。動物病院勤務

のままであれば、絶対に休めなかったので、同僚のサポートと手厚い福利厚生を本当にありがたく感じました。動物とは直接関係のない仕事でしたが、あの時の感謝の気持ちだけでも、十分働くモチベーションになっていたように思います。北海道職員は約3年ほどで転勤となります。次の職場は「と畜場」でした。その工場では当時、1日に牛30頭と豚1000頭が運び込まれ、肉になっていました。食肉工場の職員やパートさんが大勢働いている中に、「と畜検査員」として獣医師が入ります。ベルトコンベアーのように流れてくる内臓や、吊るされた半身の肉を1頭ずつ数人の検査員が順々に見て、異常のある部分を廃棄していく仕事です。私たちが普段食べている肉は、もれなく、獣医師による検査を受けているということを初めて知りました。と畜場で獣医師が担当するのは検査の部分ですが、解体には何十もの工程があり、その工程ごとに人が立ち、よく研がれたmy包丁を使い、手際よく持ち場の作業をこなしていきます。夏は汗だく・冬は凍える場内で、20秒に1頭のスピードで流れてくる豚を1日中ひたすら、黙々と捌き続けます。

私たち道職員は40分毎にトイレ休憩がありましたが、工場の従業員さんは休みなく働いていました。スーパーに並ぶパック入りのお肉ができるまでに、どれだけたくさんの人の手がかかっているかを身をもって知りました。そして、流れてくるのはさっきまで生きていた豚であり牛なのです。トラックで運ばれて来て、ブヒブヒ言っている豚や、と畜を待つ間、水が欲しくて首を伸ばす牛を目で確認して、次に見る時には肉の塊となつてぶら下がっているそれは、今まで見たどんなテレビ番組より、生きた食育の場であると感

じました。「家畜を快適な環境で飼育することでストレスや病気を減らし、それが結果として、生産性の向上や、安全な畜産物の生産につながる」という考え方、これを「アニマルウェルフェア」といい、畜産業界でも、少しずつ動物福祉に目が向けられるようになってきています。人間に食べられるために生まれ、育てられる家畜、その短い命の間は、せめて健やかで苦しみなくあってほしい、命を終えるその時まで、飢えや渇き、不安や恐怖などを感じることなく生きさせてほしいと願わずにはいられません。コストの削減や作業の効率化はもちろん重要ですが、動物の健康も守られるような産業構造を築いて欲しいと、と畜場で働いて切に思いました。さて、次の転勤で約10年ぶりに釧路へ舞い戻った私は、環境生活課の「動物管理」担当となります。今まで何気なく眺めていた冬の使者・オオハクチョウが渡ってくると、「ああ鳥インフルエンザの季節がやってきた」と憂鬱になり、道路脇に置いてある、塩カルの白い袋が死骸に見えてヒヤヒヤしたものです。ヒグマやエソシカ対策などを扱う自然環境係で、また野生動物に関わると楽しみに着任したのですが、「猫が庭を荒らす」、「犬の鳴き声がうるさい」など苦情電話の多いこと多いこと、何とかしてと言われてもどうにもできず、電話に出るのが苦痛でした。また保健所に収容されている犬猫の新しい飼い主を探すのも私の仕事で収容スペースがいっぱいになると殺処分の可能性が出てくるので、そうならないよう必死にホームページを更新しては、新しい飼い主さんを募りました。いよいよ行き詰まるたび、引き取ってくださる個人や団体の方が現れ、本当に助けられました。在職中に知り合ったボランティアさ

んには、今でも猫の捕獲などでお世話になっています。当時は、ノラ猫に餌を与えている人のところに行っては「餌をやるのを止めるか、家に入れて自分で飼うように」と指導していたものです。今でこそ「餌やりを禁止しても、こっそりやるか、猫が隣のエリアに移るだけで効果なし。家に抱え込めば多頭飼育崩壊を招く恐れがある」と言っていますが、数年前までは私も効果のない指導をしていた一人です。猫の相談を受け続けるうちに「ノラ猫を減らすには繁殖を止めるしかない」との思いが強くなり、退職して猫の不妊手術専門クリニックを開いたことは、昨年11月の講話でお話しさせていただきました。手術したものの外に放せない猫たちを多数抱えておりましたが、その一部が近々釧路でオープンする保護猫カフェ「もふまる」さんに移り、そこで新しい出会いを待つことになりました。ご興味がございましたら、ぜひ遊びに行ってみてください。「ワンヘルス」という世界共通の考え方があります。人・動物・それを取り巻く環境はすべてつながっていて、健康はひとつだということです。人・動物・環境、それぞれ健康であることが全体の健康につながります。ワンヘルスを推進することは、私たち獣医師の大きな使命だと思います。動物よりもまず人、人間第一というのは仕方のないことかもしれません。しかし、家畜やペットが健康であってこそ、購入した消費者や、育てた生産者に幸せをもたらすことができると、私は思います。ノラ猫の問題も、猫だけの問題ではなく、そこに生活する人の問題であり、地域の問題でもあります。「不妊手術をして数が増えなければ、全て丸く収まる」とはいかず、獣医師だからできることは、実はほんの一部で、問題解決には様々な分野の

方の理解や協力が必要なのです。どんな仕事も同じで、資格があればすぐにできるものではなく、長年経験を積んで、やっと一人前になれるものだと思います。その点私は、この道・筋のキャリアを積んできた獣医師とはいえませんが、今の仕事は、転々としてきた私が、ようやくたどり着いた「獣医師としてできる小さな地域貢献」ではないかと感じています。流れ流れてたどり着く仕事もあって、たいして役に立たないと思っていた経験がずっと後になって生きたり、偶然の出会いやタイミングによって、いつの間にか思いもよらない職業に就いていたりする、そんな人生の面白さも感じています。獣医師として立派なことではできませんが、猫に関する困りごとを少しでも解決して、その結果、隣近所でギスギスしない、暮らしやすい地域になり、不幸な猫も減らせるように、早く・上手く・安い不妊手術の技術習得を目指してこれからも研鑽を重ねていきたいと思っています。最後に野犬問題に取り組んでこられた一人の獣医師の話をさせてください。釧路管内には「野犬」と呼ばれる犬がまだ多くいます。元々飼い犬で人からごはんをもらったり、ゴミをあさって人間に依存した生活を送る犬を「ノラ犬」というのに対し、自然の中で自活し、人間との接触がほとんどない犬を「野犬」と呼んでいます。家畜が野犬やクマに襲われたというニュースもありましたが、野犬と呼ばれている犬が全て野生化しているわけではありません。とはいえ警戒心は強いので簡単には捕まらずオリを設置してもなかなか入りません。自然豊かな道東地区は、都市部の住宅密集地とは異なり、広大な敷地内で放し飼いでいたり、番犬として外で飼われている犬も多く、避妊去勢手術が徹底され

ていないことで、飼い犬と野犬のペアからの子犬も生まれています。その子犬が成長して野犬となり、さらに増えてしまうのですが、野犬の銃殺がマスコミで問題視されたことから、役場が殺処分を廃止したため、「ではどうやって野犬をなくすか」が課題となっています。地元の保護団体やボランティアの方が時間をかけて人馴れさせ、捕まえ保護する活動を続けていますが、時間も労力も費用もかかり、簡単なことではありません。そんな犬たちの捕獲・不妊手術・保護などに長年取り組んでこられたのが「はまなかペテリナリークリニック」の開業医、岡本麻路さんです。飼い犬は年1回の狂犬病予防接種が義務付けられており、岡本先生は厚岸町と浜中町を担当されていました。一軒一軒注射して廻りながら、犬の健康状態や飼育環境を気にかけて、飼い主さんにアドバイスしたり、不妊手術の必要性を説明していました。手術を望まない飼い主さんにも、毎年繰り返し声をかけ、忙しくて病院に連れていけない場合は送迎し、治療代はさておき親身にサポートしながら啓発を続け、役場に対しては野犬問題に取り組むよう働きかけてこられました。昨年は行政・住民・専門家が協力して野犬問題を考えていこうと協議会を立ち上げ、初めての関係者会議が10月に開催され、道東に野犬の保護施設を作りたいという夢を語ってくださいました。まさかその1か月後に亡くなるとは思ってもよらず、本当に残念でなりません。病気を抱えながら、犬のための活動を最後まで続け、コツコツとたくさんの種を蒔いて、遺された私たちに道筋を作ってくださいました。岡本麻路先生は、動物のために精一杯働いてこられた、かけがえのない獣医師です。「地域から野犬をなくす」ためには、

猫同様、不妊手術の徹底することが不可欠で、その対策が進むことが望めます。岡本先生が蒔いてくださった。種を育てていかねばと思っております。以上です。ご清聴ありがとうございました



### 釧路バ`イ0-ｸﾞﾙﾌﾞ 出席委員会

在籍会員数	18名	賜暇 / 免除	欠席 / メイクアップ	出席率
今週の出席率	13名	名 / 名	5名 / 名	72.2%
日修正出席率	名	名 / 名	名 / 名	%

会報・雑誌・IT委員長 千葉 潔 : [chiba.interior@yahoo.co.jp](mailto:chiba.interior@yahoo.co.jp)  
 今回担当 副委員長 植原 元晴 : [ucharaoto@jeans.ocn.ne.jp](mailto:ucharaoto@jeans.ocn.ne.jp)  
 委 員 貝嶋 政治 : [kaijima@coral.ocn.ne.jp](mailto:kaijima@coral.ocn.ne.jp)  
 委 員 美馬 高俊  
 サ ブ 池田 圭樹

ｸﾞﾙﾌﾞ事務所 釧路市幸町14丁目1-1ノースポルティ2階 TEL: (0154) 23-6175 FAX: (0154)23-6213